

M EETING REPORT

Keystone Symposia Oncogenes: 20 years later に参加して

細胞化学研究部 助手
鈴木 健之

キーストンリゾートにて

1月初めにアメリカコロラド州キーストンで開催されたシンポジウム Oncogenes: 20 years later に参加しました。キーストンシンポジウムは、分子生物学や細胞生物学の様々なテーマについて、毎年1月から4月にかけてコロラド州周辺のスキーリゾートを会場として開かれています。本学会は、癌遺伝子が発見されてから20年余り経たことを記念し企画されたシンポジウムです。1970年にラウス肉腫ウイルスのゲノム中に v-src 遺伝子が、最初の癌遺伝子として同定され、その後 v-src が正常細胞中の対応する遺伝子 c-src に由来することが示されて以来、癌遺伝子とそれが由来した正常細胞中の祖先遺伝子（プロトオンコジーン）は、多くの研究者の研究対象となってきました。現在、癌遺伝子研究は発癌そのものの研究ばかりでなく、正常細胞の細胞生物学の様々な分野（発生生物学、神経生物学、免疫学など）にまで拡大しています。

本学会もこのような現状を反映し



て、様々な分野の研究者約500名が参加し、キーストンシンポジウムのなかでは最も大規模なものでした。他の学会とは異なり、リゾート地での学会らしく正午から午後4時までは自由時間となっており、スキー、スケート、水泳などのレクリエーションを楽しんだり、コンドミニアムの自分の部屋でくつろぐことができます。私もロッキー山脈の雄大な自然のなかでのスキーを堪能しました。

口演発表では、分子生物学の最新の情報を収集できると同時に、ノーベル

賞受賞者のビジョップ、パーマス両博士がオープニングとエンディングをつとめるなど、ミーハー的興味も大いにみられました。私は、ヒトT細胞白血病ウイルスの転写制御因子 Tax による転写活性化機構に関してポスター発表を行いました。同じ分野の研究者と率直なディスカッションができて大変実りの多いものでした。最後に、医科研国際交流基金の援助をいただいて本学会に参加できたことに感謝の意を表するとともに、今後の本制度の存続と発展を希望したいと思います。

編集後記

医科研 NOW がスタートし、ちょうど1年過ぎました。新人の方を沢山ご紹介していますが、この様に医科研も着実に変わって来ています。今回は臨床経験のある先生からの原稿が多く、医科研における研究の motivation について考えるよい機会になったと思います。また研究費や雑用などの問題のお話しには皆様も大いに共感され

た事でしょう。私の所属する研究部の廃屋の様な“別館”（日本旅館などでは一番上等な部屋があるそうですが）にも新緑のやさしい風が吹き込んできます。都心には珍しい自然環境と最先端の生命科学の調和を図りつつ、創造性の高い研究を楽しく進められる様、医科研 NOW も微力ながらお役に立ちたいと考えています。 ㊦